

—研究報告—

小児看護学演習における看護学生の学び —滋賀医科大学附属病院臨床教育看護師の指導を受けて—

白坂真紀¹ 小野幸子² 桑田弘美¹

¹滋賀医科大学医学部看護学科 臨床看護学講座

²滋賀医科大学医学部附属病院 看護部

要旨

本学では、文部科学省平成 21 年度「看護師キャリアシステム構築プラン」に採用された「臨床教育看護師育成プラン～他分野の知を結集し臨床看護教育者を育てる～」プロジェクトを展開しており、病院と大学との unification や積極的交流をはかっている。本研究では、小児看護学演習において臨床教育看護師の指導を受けた看護学科 3 回生のレポートの内容を分析し、学生の学びを明らかにした。学生は、臨床で勤務する熟練した看護師に直接指導を受けることにより、小児看護技術の手順や注意項目の習得にとどまらず、看護の対象となる小児と家族の様子や心情をイメージしていた。これまで学んできた成人への看護とは異なり、子どもと家族を対象とした看護に困難や不安も感じるが、看護の工夫や配慮をすることの楽しさなど小児看護への興味がわいていた。看護師として子どもに技術を提供する際の心構えを学びモデル人形の採血手技などの演習を通して、臨地実習への期待がみられた。今後も病院看護師の協力を得ながら、より臨床現場がイメージできるような、小児看護の理解が深まり実習への意欲が高まるような演習方法を工夫したい。

キーワード：臨床教育看護師、小児看護学演習、看護学生

I. はじめに

本学では、文部科学省平成 21 年度「看護師キャリアシステム構築プラン」に採用された「臨床教育看護師育成プラン～他分野の知を結集し臨床教育者を育てる～」プロジェクトを展開している¹⁾。臨床（病院）と教育（大学）との unification など交流を行っており、本プランで育成された附属病院臨床教育看護師に、看護学科の講義や演習において協力を得ている。看護基礎教育課程における看護学生の看護実践能力が期待される中、臨地実習をはじめ学内における講義や演習内容は重要である。本講座でも平成 24 年度からの演習で学生は、臨床教育看護師に教育指導を受けている。本研究では、学内演習で臨床教育看護師の指導を受けた看護学生 3 回生のレポートの記述内容より学びを明らかにする。

II. 研究目的

育成期小児看護学演習において臨床教育看護師の指導を受けた学生のレポートから、学びを明らかにする。

III. 研究方法

1. 調査対象

演習に出席し、研究参加への同意が得られた看護学科 3 回生 58 名のレポート「臨床教育看護師の講義を受けて学んだこと」を分析対象とした。

2. 研究期間

研究期間は 2013 年 8 月～2013 年 11 月であった。

3. 分析方法

質的記述的方法を用いて行った。筆頭著者が、記録の表現を要約してコード化し、意味内容の共通事項ごとにサブカテゴリーを命名し、それらを抽象化しカテゴリーとした。それを小児看護学専門のスーパーバイザーの確認より信頼性と妥当性をはかった。

4. 倫理的配慮

学生に研究の目的と方法、受講後のレポートをデータとすること、研究への自由意思による参加、成績評価に影響しないこと、個人情報保護の厳守などについて説明し同意を得た。

5. 小児看護学講義と当該演習の概要

本大学小児看護学は、2 回生前期に「ライフステ

ージと健康」(2単位)、3回生前期に「育成期小児看護学」(2単位)の講義・演習と、3回生後期～4回生前期の領域別臨地実習(2単位)で構成されている。本研究は育成期小児看護学の中の演習内容である乳児バイタルサインベビーモデルを用いた「バイタルサイン測定」、乳幼児前腕モデルを用いた「採血」、ALSベビーモデルと心電図モニターを用いた「一次救命・モニター操作」、点滴ルートの作成・シーネ固定・輸液ポンプ操作など「輸液管理」であり、説明・講義を受け、グループ毎に演習を行った。臨床教育看護師が説明・講義を行い、グループ毎の演習は臨床教育看護師と教員で分担して指導した。

IV. 結果

研究目的に沿って分析した結果、855コード、38のサブカテゴリーから、10のカテゴリーがあげられた(表1参照)。以下、各カテゴリー間の関連と、カテゴリー抽出に至る結果を述べる。カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、コードを[]で示す。看護学生は、【子どもの未熟な身体的特徴を考えたケア】と【認知・言語能力が発達途上にあることを考慮したケア】について学んでいた。特に子どもの看護に必要とされ特徴的な【子どもの人権を尊重したかかわり】や【子どものがんばりを支える援助の工夫】、子どもの保護者である【家族と協働する看護】について理解していた。これまで経験してきた成人を対象にした援助とは異なる【子どもを対象とする看護に戸惑い】ながらも、【子どもの小ささに合わせた医療用具の利用】を学び、過去の【学習内容を積み重ねて理解】していた。【臨床教育看護師の高い看護実践力を尊敬】し、【小児看護学実習に期待】する様子がうかがえた。

1. 子どもの未熟な身体的特徴を考えたケア：《状態が変化しやすい子どもの身体的特徴》というサブカテゴリーは、[子どもは環境により体調が左右されやすいので配慮が必要]などのコードよりあがった。[バイタルサインの正常値は年齢により異なるため特徴を把握する]などから《年齢により異なるバイタルサインの正常値》、[免疫機能が未熟なため厳重な感染予防に努める]などから《未熟な免疫機能を考慮した感染予防ケア》、[子どもの皮膚保護のため電極テープは1日1回は替える]などから《成熟過程

にある皮膚のトラブル予防ケア》とした。

2. 認知・言語能力が発達途上にあることを考慮したケア：[子どもは検査や処置の意味がわからないので不安や恐れが強い]などのコードから《子どもは認知・言語が発達途上》というサブカテゴリーとした。[処置が子どもによってどのような体験になるかは看護師の関わり方に左右する]などから《子どもの体験は看護師の関わりが影響》、[乳児は値が変動しやすいので落ち着いている状況をセッティングする]などから《検査や処置はタイミングをはかる》、[子どもはじっとしていないので輸液では抜針しないテープの固定が必要]などから《子どもの動きを考えたケアの工夫》とした。

3. 子どもの人権を尊重したかかわり：[子どもには正直に話して同意を得てから検査や処置を行う]などのコードから《子どもの許可を得る重要性》というサブカテゴリーをあげた。[子どもは幼くても多くを感じていることが現場のお話を伺うことでわかった]などから《子どもの苦痛を想像し理解》、[子どもが何をするのか説明されなければ心の準備ができないことにつながる]などから《子どもの心の準備の必要性》を、[子どもの好きなものや安心できる環境を把握しケアに活かすことが重要]などから《個別性を考慮したかかわり》とした。

4. 子どものがんばりを支える援助の工夫：[子どもの年齢に応じた説明により受け入れて治療に臨むことができる]などから《発達段階に合わせたプレパレーション》、[バイタルサイン測定は侵襲の少ない順に行う]などから《負担と侵襲を軽減するケア》、[看護師の子どもへの励ましの声掛けが子どもに影響する]などから《安心感が得られる声掛けとケア》、[子どもの安静が保てない場合は気をそらして行う]などより《気をそらす工夫(ディストラクション)》を、[採血後はご褒美として子どもの好きなシールを貼る]や[処置のあとに褒めることが子どもの自信につながるがわかった]などから《がんばりを褒めるケア》とした。

5. 家族と協働する看護：[子どもの点滴への恐怖心は家族の説明にもよるためその内容を確認する]などから《子どもと家族の観察とアセスメント》、[両親の精神状態を考えると胸が苦しくなった]などから《家族の心情を想像し配慮》、[家族が子どもの処

置を受け入れられるよう目的や必要性を説明する]などから《家族への説明の重要性》、[バイタルサイン測定では母親に子どもを抱っこしてもらい安静を保つ]などから《処置やケアには保護者の協力》、[子どもに正しく伝えるよう指導する]などから《家族から子どもへの正しい理解の促し》とした。

6. 子どもの小ささに合わせた医療用具の利用:[血圧計のマンシュートが小さくてかわいかった]などから《恐怖心を和らげるデザインの医療用具》、[モニタリングでは子ども用に電極があることを知った]などから《体格に合わせた小児専用の医療用具》、[電源が簡単に操作されないように長押し機能がある]などから《小型の医療機器の仕組みと利用》とした。

7. 学習内容を積み重ねて理解:[小児看護技術の手順を学んだ]などから《一般的な看護手順として学習》とした。[成人に行う看護との相違点について学ぶことができた]などから《過去の学習内容に学びを積み上げる》、[座学だけではなく演習で模擬体験することの大切さを実感した]などから《実践を通し充実した演習》とした。

8. 子どもを対象とする看護に戸惑い:[輸液ルートの作成は接続部位など根本的な理解がないと難しい]などから《細やかな看護技術に苦慮》、[子どもが泣いたり暴れたら私はどのように対応できるか心配]などから《子どもへの処置やケアに緊張と不安》、[子どもを対象に様々なケアを行うのは難しい]などから《子どもを対象としたケアに困難感》とした。

9. 臨床教育看護師の高い看護実践力を尊敬:[看護師の不安や自信の無さは子どもや親に伝わる]などから《処置は自信を持って行う心構え》、[子どもの苦痛が最小限になるよう手早い動作が求められる]などから《的確で手際の良い安全・安楽な看護技術》、[機械に頼らず自分の目で確認する]などから《機械に頼らず自分の五感を使う判断力》、[臨床教育看護師は技術を身につけ子どもに対する気遣いと心配りを大切にしている]などから《子どもと家族への気遣いと心配り》とした。

10. 小児看護学実習に期待:[臨床教育看護師のように自信にあふれ丁寧かつ手際の良い看護ができる

ようになりたい]などから《臨床教育看護師への憧れ》、[聴診器でモデル人形の心臓の音を聞き涙が出そうだった]などから《モデル人形に感動》、[臨床教育看護師の講義を受けて小児看護への興味がわいた]などから《小児看護への興味と課題》とした。

V 考察

演習を通して学生は、成長・発達する子どもの身体的特徴と知的機能を踏まえたケアの特徴を学んでいた。子どもの身体的機能の成長・発達とは、体格の変化、骨・筋肉・神経系などの各器官の成熟度、運動能力の発達などを意味し、知的能力は、記憶・思考の能力、言語・コミュニケーション能力などの発達を意味する²⁾。身体機能や知的機能が発達段階により変化していくため、バイタルサインの正常値が変化するなど年齢に合わせたアセスメントが必要であることを理解していた。対象の知的能力や特性に応じ、タイミングをはかってわかるように伝える説明の仕方やかかわりにより、検査や処置の協力が得られることなど、看護者のかかわり方の重要性を学んでいた。処置を受ける子どもの苦痛を想像し、個別性を踏まえた言葉などでその内容を伝え心の準備を促し、許可や同意を得ることが子どもの人権を尊重した看護であると理解していた。臨床場面において重要な子どもへの倫理的配慮³⁾についての学びを得ていた。理解力のある成人を対象とした看護とは異なり、子どもに納得してもらいがんばる力を引き出す看護として、子どもの苦痛を軽減するケアや安心感が得られる声掛けをはじめ、プレパレーション(心理的準備)や子どもの意識を意図的にそらしたり紛らわせるディストラクション²⁾、頑張ったことを褒めて子どもの達成感につなげるかかわりなどの内容があげられ、小児看護に欠かせない項目の学びが得られていた。子どもは食事・睡眠など基本的なニーズを満たすことすべてを家族に依存しており、子どもを看護するうえで、家族は欠かせない存在である²⁾。病気を患い治療する子どもの親の気持ちを考え、子どもの健康を管理する両親への説明を行い、家族と共に協力しながらケアを行うことが、子どもにより看護を提供することにつながることを学んでいた。また、演習で用いた医療モデルや、小さなマ

表 1. 臨床教育看護師の指導を受けた学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
子どもの未熟な 身体的特徴を考えたケア	状態が変化しやすい子どもの身体的特徴
	年齢により異なるバイタルサイン正常値
	未熟な免疫機能を考慮した感染予防ケア
	成熟過程にある皮膚のトラブル予防ケア
認知・言語能力が発達途 上にあることを考慮した ケア	子どもは認知・言語が発達途上
	子どもの体験は看護師の関わりが影響
	検査や処置はタイミングをはかる
	子どもの動きを考えたケアの工夫
子どもの人権を尊重した かかわり	子どもの許可を得る重要性
	子どもの苦痛を想像し理解
	子どもの心の準備の必要性
	個性性を考慮したかかわり
子どものがんばりを 支える援助の工夫	発達段階に合わせたプレパレーション
	負担と侵襲を軽減するケア
	安心感が得られる声掛けとケア
	気をそらす工夫（ディストラクション）
	がんばりを褒めるケア
家族と協働する看護	子どもと家族の観察とアセスメント
	家族の心情を想像し配慮
	家族への説明の重要性
	処置やケアには保護者の協力
	家族から子どもへの正しい理解の促し
子どもの小ささに合わせ た医療用具の利用	恐怖心を和らげるデザインの医療用具
	体格に合わせた小児専用の医療用具
	小型の医療機器の仕組みと利用
学習内容を積み重ねて理 解	一般的な看護手順として学習
	過去の学習内容に学びを積み上げる
	実践を通し充実した演習
子どもを対象とする 看護に戸惑い	細やかな看護技術に苦慮
	子どもへの処置やケアに緊張と不安
	子どもを対象としたケアに困難感
臨床教育看護師の 高い看護実践力を尊敬	処置は自信を持って行う心構え
	的確で手際の良い安全・安楽な看護技術
	機械に頼らず自分の五感を使う判断力
	子どもと家族への気遣いと心配り
小児看護学実習に期待	臨床教育看護師への憧れ
	モデル人形に感動
	小児看護への興味と課題

ンシエットのサイズ、細い注射針や駆血帯、可愛いデザインの医療物品、病棟では自由に触れることのできないモニターの操作などを通して、子どもの小ささなど対象の特性に合わせた医療用具の利用について学習していた。

これまで学んできた基礎看護や成人看護の知識や技術を振り返り踏まえながら、小児看護の演習内容の学びが記述されており、過去の学びの上に積み重ねる学習過程がうかがえた。一方で、細やかな看護技術に苦慮し、これまで学んできた成人とは異なる子どもへのケアに難しさや戸惑いが生じ、緊張や不安が述べられていた。効果的で実践的な学生の学びを意図し、演習を行うために実技インストラクターを非常勤職員として採用し小児看護技術教育を行っている報告もあるように⁴⁾、高い実践力を身につけた臨床教育看護師の技術、具体的には機械に頼らず自分で判断することの重要性や、熟練した看護技術、子どもと家族への気遣い、看護師としての心の持ち方など精神面にまで及ぶ学びが得られていた。そのような臨床教育看護師に憧れ、モデル人形の心音に感動するなど小児看護への興味や関心が、小児看護実習への意欲につながっていたと思われる。

謝辞

看護学生にご指導くださいました臨床教育看護師の堀井結花小児病棟副看護師長、川合貴子 NICU/GCU 副看護師長、看護臨床教育センター長澤井信江准教授に感謝申し上げます。

文献

- 1) 藤野みつ子, 瀧川薫, 澤井信江, 文部科学省「看護職キャリアシステム構築プラン」紹介! 滋賀医科大学臨床教育看護師育成プラン—専門分野の知を結集し臨床看護教育者を育てる—, 252-255, 看護管理 Vol. 21, No. 3, 2011
- 2) 奈良間美保著者代表, 系統看護学講座専門分野Ⅱ 小児看護学概論 小児臨床看護総論 小児看護学, 31, 221, 154, 医学書院, 2012
- 3) 日本小児看護学会: 小児看護の日常的な臨床場面での倫理的配慮に関する指針, 2010
http://jschn.umin.ac.jp/files/100610syouni_shishin.pdf
- 4) 松浦和代, 吉川由希子, 三上智子: 看護学生の教育を再考する演習の工夫—看護技術教育の工夫— 特集 小児看護における教育的アプローチ, 小児看護, 第 36 巻第 2 号, 144-149, 2013